

地面師

田中 愛子

最近のテレビ番組は、ニュースでもワイドショーでも必ずといっていいほど字幕がつく。ニュースの内容はもちろん、インタビューの応答やコメントの発言が目でも確認できるので助かっている。以前、災害関連のNHKニュースのなかで、首相が「現金をありがとうございます。」などと言っているので、おやつと思つて画面を見ると、字幕には「現金」ではなく「義捐金」とあつた。外国から援助のお金が贈られたのである。それならば納得。そんなこんなで字幕に助けられている昨今であるけれど、最近ニュースをにぎわしている「地面師」は、耳で聞いてももちろん、文字をみてもぴんと来なかつた。ニュースを聞いているとどうやら土地にからんで悪事を働く人のようだ。念のため広辞苑をひいてみると、なんと「自分に所有権のない土地を勝手に売り飛ばす詐欺師」となんだか地面師にうらみでもあるかのような語釈である。

「師」といえば医師、教師、看護師、薬剤師などなど立

派な職業の人たちが浮かんでくる。さらに牧師、宣教師、法師、教誨師といった宗教界の人々もいる。

真面目過ぎる「過ぎる」部分が駄目ならむ真面目自体そのものはそれで佳しとして 奥村晃作「鬱と空」

奥村さんは、真面目はいいが過ぎるのがいけないと詠う。この「真面目過ぎる」という言葉は、よい意味の「真面目」にあまりよくない感触の「過ぎる」が付くことで、人に対して批判的な意味をもつ言葉が生まれる例である。けれども「地面師」は「地面」も「師」も悪くない。地面はあの地面だし、「師」は学問や技芸を教えてくれる人、つまり先生という、むしろいい単語なのに、ふたつが組み合わさると途端に怪しい人物を指すようになってしまう。

ほかに地面師のように「師」のつく悪い人はいないかと考えると、「詐欺師」や「ペテン師」が思い浮かぶ。でも、詐欺もペテンもそのこと自体が悪いことであり、それをなりたいとするから詐欺師、ペテン師となる。少し地面師とはことばの成り立ちが違う。

さて、年ごろのお嬢さんをお持ちの奥さま方、お嬢さんのお見合いのお相手が狂言師だと聞いて、野村萬斎さんのような方を思い描いて喜んではいけません。そのお方は広辞苑でいうところの狂言師①狂言を演ずる役者なのか、それとも③たくらんで他人をだます人なのか、そこをしっかりと確かめなくてはなりません。